



Title	<書評> 磯村健太郎著『ルポ仏教、貧困・自殺に挑む』
Author(s)	高瀬, 顕功
Citation	宗教と社会貢献. 2011, 1(1), p. 119-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/18834
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

磯村健太郎著

『ルポ 仏教、貧困・自殺に挑む』

岩波書店、2011年2月刊行、B6判、xi+169頁+5頁、1900円+税

高瀬 顕功*

1. 本書について

袈裟を着た僧侶が自転車にまたがってどこかへ急いでいる。「貧困・自殺」という固く重い文字とは対照的に、ポップに描かれた僧侶の表紙が印象的な本書は、現役の新聞記者が手がけたルポルタージュである。著者は、朝日新聞で主に宗教の記事を担当しており、同紙のこころ面や文化面に執筆した記事が本書のもとになっている。本書の根底には、いのちが軽んじられて貧困や自殺が社会問題となっている現代の日本社会を危惧し、いのちそのものの問題をとらえなおしたいという著者の思いがある。そして、貧困や自殺の問題に関わる僧侶たちの姿から、今の社会に必要な理念を探すことを目指している。「はじめに」で記されている「いのちに対する揺ぎない理念をかかげ、現実はどう立ち向かうか」(p.vii)という本書の問いを、社会問題に取り組む仏教者の姿勢の中に著者は求めようとしている。

2. 本書の位置づけ

宗教団体や宗教者の社会参加や社会貢献といった、宗教の現代的意味が問われるようになったのは最近にはじまったことではない。伝統仏教も例外ではなく、世間の厳しい批判にさらされてきた。その多くは、原始仏教と現代日本の仏教を比較し、現代日本の仏教は「本来の」仏教の在り方から乖離しているという視点から、これまで慣習的に行なわれてきた仏式葬儀・法要などの意義、墓祭祀を基盤とした檀家制度の在り方など、いわゆる「伝統」的に日本の寺院や僧侶が担ってきた役割を問い直すものである。

一方、こういった批判を受け止めながらも、伝統仏教を再起させようとする論者も存在する。たとえば、文化人類学者である上田紀行は、積極的に社会に関わろうとする「目覚めた僧侶」たちの姿に、現代の苦悩に向き

* 大正大学大学院博士後期課程/pratyaya@mac.com

合う「現代仏教」を見出し、伝統仏教教団の僧侶を鼓舞する〔上田 2004〕。僧侶であり自身もエネルギーに活動する高橋卓志は、自らの実践例を提示しながら、既存の「伝統」に安住しない意識や覚悟を持って僧侶自身が変わることの必要性を説いている〔高橋 2009〕。これらはともに、「伝統」的領域から僧侶が外へ出て行くことで、新たな寺院の可能性を提示しようと試みるものである。本書もやはり、葬儀や檀家制度という「伝統」から活動領域を広げた仏教者へと焦点を当てている。

本書は、すべての章で貧困や自殺といった問題に取り組む仏教者の活動を取り上げており、いわば仏教者の社会活動事例集ともいえる。また、軽やかで読みやすい文体は、読み手と「現場」の距離を埋め、臨場感あふれるものに仕上がっている。各章で紹介される仏教者の取り組みは、活動の内容だけでなく、活動の主体たる僧侶の内面まで丁寧に描かれている。貧困や自殺は、現代社会特有の問題であるように思えるが、その根幹にあるのは「つながり」や「苦」という、むしろこれまで仏教者が「伝統」的領域で扱ってきた分野であった。本書では、著者が直接取材した12の事例があげられており、現代の社会問題に取り組む僧侶の実態として、それだけでも参照に値する。しかし、著者はこれら諸活動を評価したり分析したりすることはせず、あくまでも紹介するにとどまっている。活動する仏教者にただ寄り添うという視点で書かれた本書は、鼓舞も叱咤もしないが、確実に仏教者をエンパワーメントする力を有している。

3. 構成と内容

本書は終章を含め全六章からなる。その構成は大きく、第一章から第三章までの貧困問題に取り組む活動を追った「貧困問題編」と、第四章、第五章の自殺問題に取り組む活動を追った「自殺問題編」とにわけられる。以下、本書の構成に沿って、それぞれで紹介されている活動の概略を記す。

第一章では、本書の導入役として、最近活動をはじめた仏教者団体「ひとさじの会」が取り上げられている。いのちに寄り添いはじめ、現場に出ることで葛藤する僧侶たちの姿を通して、著者は、あらためて「いのちに寄り添うこと」を問いかける。

第二章では、活動の中心場所を寺院におき、取り組んでいる仏教者に焦点が当てられる。廃屋だった民家を修復し、職を失った行き場のない人のシェルターを運営する宮城県亶理町の行持院。御供物として仏前にあがるお米を活用し、食糧支援を行なう東北地方や滋賀県の僧侶。大阪有数の寺院として、つながりある社会の在り方を考えるための市民講座を開講する一方で、寺院の裏手に路上生活者のためのシャワー室と診療所を設ける天王寺区の一心寺。三者の活動の内容は異なるが、いずれも寺院の空間や寺院のもつ寺檀関係を活用した、寺院ならではの取り組みである。

第三章では、生活困窮者とともに暮らし、人生のゴールを見届けようとする仏教者の活動が描かれている。自ら足を運び、路上生活者との水平的な交流の中で、精神的・宗教的な関わりを志向する釜ヶ崎の僧侶。NPO 団体を立ち上げ、生活困窮者を自前の寮に受け入れ、人生のゴールまで寄り添う尼僧。前章とは対照的に、両者の活動の足場は、寺院の外である。

第四章では、自殺念慮者の苦しみを受け止め、相談者に寄り添う姿勢を貫く仏教者の活動が取り上げられている。「あなたのお話聴きます」という張り紙を出し、住職が相談者を寺院に招き入れる東京港区の正山寺。往復書簡を通じた念慮者への寄り添いととも、自殺者の追悼法要を行い遺族にも寄り添おうとする首都圏在住の僧侶団体「自殺対策に取り組む僧侶の会」。互いにありのままに認め合える関係をめざし、電話相談を受け付ける市民団体を立ち上げた浄土真宗本願寺派の僧侶。これらの仏教者は、自殺の原因や状況を聞くのではなく、自殺に至ろうとする感情を聴くという点で共通している。それは、自殺に対する価値判断はひとまずおき、相手の心に耳を傾けるといふ姿勢である。

第五章では、「つながり」の回復に努める僧侶の取り組みが紹介されている。寺院をいつでも誰にでも開放し、電話相談を24時間受け付ける千葉県成田市にある長寿院。自殺が起りやすい孤立化、孤独化の環境を改善するため、地元町民有志と共同で、町立図書館の中にコミュニティスペースを設けた秋田県藤里町の僧侶。パソコンを駆使してチャット会や座禅会を行い、インターネットを通じてつながった相談者を、リアルなつながりへと導く岐阜県関市の禅僧。これらは、電話越しであれネット越しであれ、つながりを実感できる場を提供し、関係性の構築によって自殺防止に取り組む活動である。

終章で、著者は「知ってしまったからにはほうっておけず、相手のかたわらにしようとする」(p.162) 姿勢をこれら仏教者の活動の共通点として見出している。また、個々の苦の現場では総論的な教義は通用しないものであり、教義を語らない「寄り添う仏教」の姿勢を評価する。そして、本書の冒頭で投げかけられた問いは、既成仏教教団の教えや制度という「大きな物語」ではなく、それぞれの苦の現場に寄り添う仏教者の「小さな物語」を積み重ねていくことで浮かび上がってくるものであると結んでいる。

4. 本書に対するコメント

メディアでは「無縁社会」特集が生まれ、貧困問題や自殺問題が社会問題化している今日、「苦」に寄り添い、「つながり」を再構築する仏教者の取り組みを切り口に展開する本書は、時宜を得たものであり、かつ示唆に富むものである。

本書では多くの事例が紹介されているが、その活動形態は多様である。大まかに分類すれば、僧侶が寺院を足場にし、寺院空間を開放して行うタイプと僧侶が寺院の外に出ていくタイプ、あるいは独自に活動を行なうタイプと同志を募り各種団体と協同して行なうタイプがあるだろう。偏りなく各種タイプの活動が紹介されており、これらの事例は仏教者の活動を分析する上で大いに参照されるべきものである。くわえて、各々の事例は活動内容だけでなく、活動の担い手である僧侶のライフストーリーを含めた活動動機、活動意識なども記されている。それらを鑑みれば、活動の背景には、僧侶の役割を見出したうえで活動に向かう姿勢と活動を通じて僧侶の在り方を感じ取る姿勢とが交錯した僧侶の活動意識をうかがうことができる。また、僧侶になることを「選択」した在家出身者が比較的多く取り上げられていることにも気づく。このように、本書の事例は実に示唆に富むものであるが、これはひとえに著者の丹念な取材と丁寧な記述の賜物であるといえる。

最後に 2 点の指摘をくわえておく。まず、本書の事例は、すべて活動主体の側から描かれており、「受け手」がそれをどのように評価しているかについての視点が弱い。もちろん、貧困問題や自殺問題の当事者から評価

を得ることは簡単ではないが、「寄り添う」姿勢が仏教者の独り善がりのものでないことを示すためには、今後、受け手の側からの描写も求められるであろう。

また、著者は、「小さな物語」としての仏教者の取り組みを評価し、「大きな物語」としての仏教はもはや受け入れられるものではないという。しかし、寄り添う仏教者が「大きな物語」の仏教の中で自己を位置づけ、またそれによって活動が下支えされている場合もあることを忘れてはならない。そのことは、各章で語られた仏教者の活動意識の中からも読みとれる。個々の苦の現場において「大きな物語」はフィットしづらくなりつつあるかもしれないが、個々の仏教者は「大きな物語」にもとづいた「小さな物語」の実践を行っているのである。

だが、これらの点は本書の持つ魅力を大きく損ねるものではない。本書で取り上げられた仏教者の活動姿勢のように、現代社会の苦に寄り添う仏教者に寄り添うという本書のスタイルは、仏教者の取り組み、活動意識をありのままにとらえることに成功している。すべての事例は十分な取材に裏打ちされており、信頼性に厚く、かつリーダビリティに富んだ本書は優れたルポルタージュであると同時に、伝統仏教の僧侶と社会貢献の接点を探るために欠かせない一冊といえるだろう。

参考文献

- 上田紀行 2004 『がんばれ仏教！—お寺ルネサンスの時代』NHK ブックス。
高橋卓志 2009 『寺よ、変われ』岩波書店。